

〈エクソダス〉 2011 通信2

今こそ、「不可能なものの胸ぐらをつかむ」ことへ挑みたい

——「沖縄セミナー・プレ企画：沖縄と東北が、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！日本国家—社会の構成的解体へ向けて」（4/24）を振り返る

「生・労働・運動ネット」では、昨年末から、富山平和運動センターとの共催の企画として、ヤマト(日本本土)の私たちが、沖縄での「自己決定権の樹立」を求める動きといかに連帯するのかをテーマとして、沖縄セミナーの準備を進めてきました。その準備の最中の、今年3月に発生した大震災／原発事故後のマスコミでは、普天間基地「移設」問題は、すっかり影が薄くなってしまったかのような扱いをしています。しかし、大震災によっていったんは延期された「2プラス2会議」(日米安全保障委員会)が、6月に予定されていることにも現れているように、沖縄の「軍事植民地」的状況を永続化しようとする動きは、依然として強固に存続し続けています。

現在、東北地方太平洋沿岸では、地震／津波／放射能汚染という三重の苦難の下で多数の人々が呻吟している一方で、沖縄の人々は、日本「復帰」後、ほぼ40年を経た今なお、基地の存在を強制され続けることによって、「生」の根底までも侵害されるという状況が続いています。しかし、沖縄のことは沖縄のことは、東北のことは東北のことは、問題を立てる限り、私たちが、大きな苦しみの中にいる東北や沖縄の人々と共につながり会うということは、ありえないのではないかと。そこから一步を踏み出し、多くの人々の「生の困難」を生み出しているこの国のあり方を大きく創りかえていくことへの一つの手がかりとして、沖縄と、東北、そして、私たちが一連なりに声を上げるという「声の蜂起」をどのように成し遂げるかを考えあいたい。そのような思いから、4月24日(日)、沖縄セミナーの「プレ企画」として、表記のような集いを行いました。

以下、4月24日の沖縄セミナー・「プレ企画」での提起・報告のアウトラインを紹介します。

この事態を日本国家の「構成的解体」へといかに転じるのか

この間、スポーツ選手や芸能人などが、「がんばろう！ニッポン」といったスローガンを盛んにテレビで叫んでいるが、それは、一体、何のことを言っているのか、と思ってしまう。多くの人たちが、これほどまでに無自覚に自分と国家とを同一視して疑わない、ということが進んでいる国は、世界でもあまり例がないのではないかと。このような危機的な状況であればこそ、逆に、それを一つの転機として、この日本列島と呼ばれる空間を私たちはどのように組み立てなおすか、が問われているはずなのに、今、とりわけ、マスコミでは、「がんばろう！ニッポン」といった「自発的服従」の声だけしか、聞こえてこな

い。

このような状況の中で、今、私の胸中には、「災害資本主義を打倒せよ！」という思いが、ふつふつとわき上がって来ている。「災害資本主義」というのは、聞き慣れない言葉かもしれないが、これは、カナダ人のジャーナリストで、オルタナティブグローバリゼーション運動の活動家のナオミ・クラインの造語だ。クーデターといった軍事的な暴力が引き起こす心理的ショックや、巨大な自然災害の被害を利用して、社会保障・福祉の縮減や、雇用の不安定化、貧困層の追い出しによる都市再開発といったネオリベ経済政策を無抵抗に進めようとするあり方を、彼女は「災害資本主義」と名付けている。

ニューオーリンズでは、以前から低所得者層の黒人向けの公共住宅を撤去して商業地の再開発を進めようとする動きがあったのだが、2005年8月のハリケーンが引き起こした大洪水によるニューオーリンズの壊滅的な被害状況を聞いた、ルイジアナ州のある政治家が、「やっと、ニューオーリンズの団地が片付いてくれたよ。我々ができなかったことを、神様が代わりにやってくれたのさ」と語ったというエピソードがある。そのように、大洪水によって、多くの人々が住み慣れた住居を失い、悲惨な境遇に突き落とされるという事態さえも、「火事場泥棒」的にビジネスチャンスに転じようとする露骨な資本主義のあり方を、ナオミ・クラインは「災害資本主義」と呼んでいる。日本も含めて、現在、世界中で起きていることの多くが、その言葉によって説明できるのではないかと思う。

小泉「構造改革」以降、「自己責任論」が日本社会を覆い尽くして、「自己決定したいのなら、その結果を自分で引き受けろ！」という圧力が高まり、人間が既成の枠からはずれて生きることを過剰に恐れるようになるという傾向を生み出している。また、そのことが、現在の自発的服従の風潮の背景をなしているように思う。そのように、「勝手に既成の枠の外に出て、一切の『生の保障』を失うことになっても、お前の『自己責任』だ」として、社会から逸脱することに対する人々の恐怖心をかき立て、自己規制させることで、既存の資本主義的な秩序を堅持しようとすることも含めて、「災害資本主義」と捉えてもいいのではないか。

こうした「災害資本主義」に対抗すると共に、ストレートに自分を国家に同一化するようなこの国の自発的服従の風潮を打破するためにも、ある人の言葉を使えば、「不可能なものの胸ぐらをつかむ」ことが求められているのではないか。とりわけ、このような危機的な状況であればこそ、逆に、今までの平穏な日常の中で不可能だと思われていたことを、敢えて突破しようとするということがあってもいいはずだ。何が「不可能なものの胸ぐらをつかむ」ことに当たるかは、それぞれの人にとって決して同じではないだろうが、それは、私の場合で言えば、今日の集会のタイトルにもあるように、「日本国家—社会の構成的解体」ということだ。それをもっと分かりやすく言いなおせば、「日本国家を解任せよ！」ということになるだろう。

ネオリベ「構造改革」が最初に導入されたのは、南米諸国、とりわけ、アルゼンチンだが、アメリカ政府・資本の後押しによって、2000年代初頭から、「構造調整」の名の下で、社会保障・福祉の大幅な削減と「規制緩和」が強行された。しかし、その余りの過酷さに対してアルゼンチンの民衆が蜂起し、「構造調整」の進展を阻むための直接行動が、首都のブエノスアイレスを中心に展開された。そうしたアルゼンチンでの反「構造調整」の闘いの中で唱えられた、「皆、消えろ！一人も残るな」という有名なスローガンがあるが、それは、つまり、「国家は消え失せろ！」ということだと言ってもいいだろう。アルゼンチンでの民衆蜂起を皮切りに、南米諸国では、次々と反米政権が誕生したが、そうした民衆蜂起は、自分たちを「生の困難」に追いやる国家を解任しようとする民衆の意志を、明確に示すものである。

ように思う。

今年3月に、列島東北部を襲った大きな事態が発生してから1か月余りの間、以上のようなことをずっと考えて続けていたのだが、この「驚天動地」に私たちは何をなすべきかを考えようとしていた時に、私たちの元に届いた「言葉群」がある。

その一つが、「辺野古への基地建設を許さない実行委員会」が、菅首相と北沢防衛大臣、松本外務大臣に宛てた、「日本政府は『思いやり予算』などすべての米軍駐留経費と辺野古新基地建設関連費用を、東日本大震災の被災者救援と復興に振り向けよ！」という「要請書」だ。その「要請書」では、「思いやり予算」と辺野古での新基地建設を停止して、その分の金額を大きな苦難の中にいる東北の被災者の人たちへの支援に当てることを政府に要求すると共に、被災者への救援が、「トモダチ作戦」という名の下での日米合同の軍事行動として展開されたことに対して、沖縄駐留米軍の「正当化」を図るものだとして強く抗議している。そのように、沖縄の人たちが、基地の存在によって「生」を侵害されている自分たちの状況と重ね合わせて、被災者の人たちと共に手を携えようとしていることに、私は深く感銘を受けている。そうした沖縄からの言葉に対して、被災地にいるのではない私たちが、どのような言葉を寄せ合おうとするのかが、問われているように思う。

あたかも、この事態にあわせて発せられたものであるかのように、沖縄と、東北、そして、私たちがいかに一連なりに「声の蜂起」を成し遂げるのかを考えるための、もう一つの手がかりになるように思えるのが、遠く、カリブ海のフランス語圏のアンティューユで、2009年2月に発せられた「高度必需品宣言」だ。その内容や、思想的な意義については、この後の報告を聞いていただきたい。

「高度必需品宣言」をめぐって

キューバや、ジャマイカ、プエルト・リコ島といったカリブ海の中でも大きな島の少し先から南米大陸にかけて、アーチ状に小アンティール諸島(フランス語ではアンティューユ)の小さな島々が連なっているが、その中に、マルティニック島や、グアドループ島といったフランスの「海外県」が、英語圏の島々の間に点在している。それらの島々は、かつては、黒人奴隷の労働によるサトウキビ等の熱帯作物の栽培を主要産業とする、フランス領の植民地だったが、第2次大戦後もフランスから独立せずに、法的にはフランス本国と対等な「海外県」として、現在もフランス国家の一部をなしている。

2008年9月の「リーマンショック」後、投資マネーが石油や穀物の先物市場に向かい、全世界的に燃料や食料品の価格の高騰が発生した。それに対して、フランスの海外県のグアドループ島では、2009年1月にゼネストが始まり、それは44日間の長期にも及んだが、その中で、低所得者層の最低賃金の引き上げや、生活必需品や燃料費の値下げ等が要求として掲げられた。それと連動して、マルティニック島でも、最低賃金の引き上げや、食料品等の必需品の値下げ、水道・ガス・電気代の値下げ等の要求項目を掲げて、同年2月からゼネストが始まり、36日間続いた。そうしたアンティューユでのゼネストの最中の、2009年2月に、ゼネストを全面的に擁護すると同時に、そこでの諸要求を「高度必需品」への要求にまで高めることに向けて、エドゥアール・グリッサンや、パトリック・シャモアゾーといった、カリブ海のフランス語圏を代表する9人の知識人によって発表されたのが、「高度必需

品宣言」だ。

「高度必需品宣言」では、まず、その冒頭で、これまでばらばらで孤立していた諸闘争がアンティューでのゼネストで同一基盤の上に組織化されただけでなく、そこで生み出された「リヤンナジ(絆・連帯・団結を意味するクレオール語)の推進力」を通して、人々の現実的な苦痛・困窮状態が希求(希望)にまで到達し、それが「忘れられ、見えにくかった」人々や、他の苦しむ人々の間にまで広がったことが、何よりも重要なことだと述べている。

それに続けて、「高度必需品宣言」では、「飲み、食べ、生き延びるといった直接的必要性」(散文的なるもの)と、「自己成熟」(詩的なるもの)とが、有機的に結合されるべきだという理念が掲げられている。そうした理念に基けば、例えば、食物は、単に我々の生命を養うものに止まらず、「尊厳、名誉、音楽、スポーツ、ダンス、哲学、恋愛」といった「内奥の自由な欲望の実現に割り当てられた自由な時間の糧」となるものであると、同「宣言」は謳っている。一方、「宣言」は、我々の生活を利己主義的な個の追求に閉じ込め、自分の労働が生み出すものを商品として消費するだけの「消費者」であるか、または、際限なき利潤を追求するだけの「生産者」という「二つの深刻な貧困」を強いるものであるとして、経済的自由主義を批判している。労働運動の歴史の中で、20世紀の初頭のアメリカのマサチューセッツ州の裁縫工場の女性労働たちがデモをしながら唱えた、“Bread and Rose”(「私たちはパンだけではなく、身を飾るバラの花も求める」という有名なスローガンがある。同様に、衣食住といった生存のための基本的な必要物の確保と、文化・芸術の創造や享受といった高次の欲求の実現とは分離されるべきではない、という理念に立って、「高度必需品宣言」では、『最低必需品』を別の消費物の部類、すなわち、『高度必需』に属するような部類に移すこと」を訴えている。

それでは、「高度必需品宣言」では、具体的に何を「高度必需品」と捉えているかということだが、「宣言」では、「高度必需品」の内に入るものとして、「人民と民衆を創るといふ、世界の大きいなる舞台に尊厳をもって入る」ことを掲げ、それに続けて、「この運動は、我々自身による我々自身の権力へたどり着けるような変革と予測の政治力を切り拓く、そうしたビジョンの中で開花すべきである」と述べている。マルティニックでは、フランス本国からの独立か、それとも、このまま、「海外県」という位置に留まるのかをめぐって、激しい政治的な論争が繰り広げられきた。「宣言」では、そのような、独立か、さもなくば、このままフランスに従属し続けるのかという二者択一の「隘路」を超えて、「変革と予測の政治力を切り拓くビジョン」や、新しい政治的な主体の創造(「人民と民衆を創る」)ということをも、「高度必需」として捉えているといってもいいだろう。

また、「宣言」では、「健全に、そして今とは別様に食べることで、我々は大規模流通業をつまづかせることができる」、「一切の自動車を絶つことで、我々はSARA(アンティュー石油精製会社)と石油会社を地下牢に押し戻すことができる」、「ごくわずかな水滴でも、宝物の最後の欠片でもあるかのように使用することによって、水道会社を、その法外な値段をせきとめることができる」、といった主張が、掲げられている。そこに見られるように、エコロジカルな自給自足への志向が、小さなコミュニティの中に閉じこもるというのではなく、「散文的なるもの」と「詩的なるもの」との結合の上に立って、全世界を覆い尽くすネオリベ経済システムとの闘いに向けた、反資本主義的な抵抗や、具体的な実践として構想されていることが、「宣言」の大きな特色であるように思う。

それらと併せて、「高度必需品宣言」では、「構造的失業という鉄条網なき収容所」の内で、人間の「能力や才能、創造性、有意義な熱情」が不毛な状態に置かれていることに対して、「完全雇用」を主

張している。しかし、その場合の完全雇用とは、「生産本意の凡庸な発想」に基づくものではなく、「社会性の再興」や、「破壊された人々への連帯や、共有、支持」、また、「生態系の復興について何をなすのか」、という発想によって検討・構想されるべきものであることを、「宣言」は訴えている。その時の要となるのが、「創造的消費(*créaconsommation*)」という概念だ。今日の集会のタイトルの中で、私たちは、日本国家—社会の「創造」的「破壊」という、対立する概念を接合させた言葉を掲げているが、“*créaconsommation*”も、フランス語の「創造」と「消費」という反対の意味の語を接合させた言葉だ。学問や芸術は、単なる商品としては消費しきれない強度をもった「創造的生産」であるという意味では、学問や芸術を消費・享受するということも、単なる商品の消費に止まらない「創造的消費」となりうるものだろう。「宣言」では、「詩的価値においては、失業も、財政援助も存在しない」と述べているが、この時の「完全雇用」とは、賃労働の枠を超えて、万人が社会の中でそうした「創造的消費」に参加することとして、提起されていると言ってもいいだろう。

かつてはヨーロッパの植民地主義の暴力にさらされ、現在もフランスに対する従属構造の下に置かれると共に、ネオリベ・グローバル経済システムの破壊性に見舞われるという、苦難の歴史と現実の経験の上に立って、カリブ海のアンティューユの小さな島々から、新しい世界のあり方を創りだすことに向けた「予兆的な政治」を提示しようとする意志や誇りが、この「高度必需品宣言」には込められているように感じている。なお、「高度必需品宣言」では、「創造的消費」に関わる芸術や学問、教育の分野が、「原則的無償」で営まれることが提起されているということも、最後に補足しておきたい。

沖縄と、東北、そして、私たちが共に声を連ねる「ありどころ」を探る

今ほどの「高度必需品宣言」についての報告の元になった論文が掲載されている「思想」誌の2010年9月号に、今年9月の沖縄セミナーでの話し手として迎えることを予定している仲里効(なかざといさお)さんが、「高度必需品宣言」への共感を込めて、「遠き声の流紋へ——ネシアと叛乱の境界」と題する文章を寄せている。仲里さんは、沖縄で「EDGE」という雑誌を編集しているが、これまで、日本本土ではあまり知られていなかった沖縄の写真家たちを紹介したり、沖縄をテーマにした日本映画の系譜をたどるといった、沖縄の言論界を大きく変えるような仕事をしてきた人だ。

仲里さんは、「遠き声の流紋へ」の文章の中で、「アンティューユは遠い、そして近い」というフレーズを何度も使いながら、地理的にははるか遠く離れたカリブ海のアンティューユと、東シナ海にある沖縄との有りようの近さや共通性を指摘している。その中に、『高度必需品』という考えを通して詩的なるものへの自覚を呼びかける、その先に私は〈独立〉を新しくしていく、〈独立〉を発明していく構えを読み取る」という、印象に残る一節がある。現在、「民族独立」といったスローガンを単純に唱えることはできないような時代状況になっているのだが、その中で、仲里さんは、敢えて「高度必需品宣言」の中に、「〈独立〉を発明していく構えを読み取る」と言っている。つまり、マルチニックの人々が、第2次大戦後60年余りを経て、なおも存続する植民地主義的な社会の枠組みを打ち破って、これまでの〈独立〉とは違うあり方を新しく「発明」しようとしている、と仲里さんは言っているのだが、それは、この間、沖縄での「自己決定権の樹立」を求めようとする動きに、対応するものではないか。

更に、仲里さんは、「遠き声の流紋へ」の最後の方で、『高度必需品宣言』の詩的なるもののポスト

コロニアルの流紋に、亜熱帯の地で焼かれたユートピアを投擲する」と、述べている。現在の世界では、植民地主義政策は公的には廃止されたことになっていながら、実際には植民地主義的な社会構造がかったの植民地で強く人々を拘束しているという状態が、「ポストコロニアル」ということだろう。そうしたポストコロニアルな状況の中にある沖縄から、新しく〈独立〉を発明しようとする声の広がりにつながることに向けて、「亜熱帯の地で焼かれたユートピア」、つまり、日本「復帰」後のほぼ 40 年にも及ぶ沖縄の苦難の軌跡の中で育まれてきた「自立」・「自己決定権の樹立」への夢を、遠くカリブ海から聞こえてくる「流紋」の中に投げ込もう、と言っている。

今、まさに、現在の沖縄の最も先端で発せられる〈声〉が、はるか「遠い、そして、近い」カリブ海のアンティューユからの〈声〉と重ね合わされようとしているのではないか。そのように、この間の沖縄での動きが、そうした世界的な同時代性や、「共振性」をもつものであるということを、仲里さんは、私たちに示しているように思う。

以上のように、カリブ海のアンティューユと沖縄とのつながりをめぐる仲里さんの文章を紹介したが、その上に、更に、沖縄と東北とのつながりについて考察している、ある文章を紹介したい。60 年代末に、日本「復帰」が政治的なスケジュールに上った沖縄で、そのことに異を唱えた 3 人の人たちがいて、彼らの主張は、「反復帰」論と名づけられている。その 3 人は、「反復帰」論の「トライアングル」とも呼ばれているが、その内の 1 人が岡本恵徳という人だ。ちなみに、後の 2 人の内、一人は、詩人で「反国家の凶区」といった著書でも知られる新川明で、もう 1 人は、「琉球共和社会憲法C私(試)案」を提起した川満信一だ。

岡本恵徳は、作家の島尾敏雄が 60 年代から提起した「ヤポネシア論」を論じた、『『ヤポネシア論』の輪郭』という本を書いている。島尾敏雄は、アジア・太平洋戦争の末期に、人間魚雷作戦による特攻隊の隊長として奄美大島に隣り合う加計呂麻島に派遣されたが、戦後、その時に知り合った奄美の女性と結婚して、東京で作家生活を送っている。しかし、他の女性との問題が引き金となって、家庭内で激しい葛藤が続いたため、島尾敏雄は、連れ合いの女性の故郷の奄美に家族で移住して、そこで図書館長を勤めていた。奄美での暮らしの中で感じることを基に、彼は、日本列島を異質で多様な地域の連なりとして捉えて論じる「ヤポネシア論」を、いくつものエッセイで展開している。

福島原発事故のニュースの中で、時々、福島県の南相馬市という地名が出てくるが、島尾敏雄の両親は、その辺りの地域の出身だ。岡本恵徳は、『『ヤポネシア論』の輪郭』の中の「東北へのまなざし」という文章で、67 年頃から、島尾敏雄が、奄美も含めた琉球と東北とに共通性に言及するようになったことに注目して、「琉球の島々と東北との間に、何か類似の気分が流れていることに気づきだした。そして、東北の背後には、アイヌ世界がうずくまっている」という、島尾敏雄の一節を引用している。それを受けて、岡本恵徳は、『東北』の背後には『アイヌ』を見通す立場に立ってしまえば、『琉球弧』と『東北』を同時に阻害する存在としての『倭(ヤマト)』についての言及が出てくるのは、それほど遠いことではない」と、述べている。なお、「琉球弧」という言い方は、昔もあったのかもしれないが、とりわけ、沖縄の日本「復帰」以降、「反復帰」論を唱えた人たちも含めて、多くの沖縄の人たちが、「復帰」後の状況に対する違和感を感じるようになるという状況の中で、日本本土に所属する奄美諸島も含めて、沖縄の島々の連なりを表現するために、改めて生み出された言葉だ。

おそらく、今、沖縄の人たちは、沖縄のことを日本列島の「南端」ではなく、アジアの「北端」として捉

えているのではないか。そのように、日本本土よりも、アジア、とりわけ、東アジアとの関係で、沖縄の状況を捉えようとする動きが、沖縄の人たちの間で出てきている。そのような意味で、仲里さんのような人にとって、島尾敏雄の「ヤポネシア論」は、共感と同時に、大きな違和感を感じさせるものではないかと思う。それは、単純に言ってしまえば、「ヤポ」、つまり、「日本」ということが、すでにそこに含まれているからで、沖縄の人たちからすれば、せっかく、この列島を様々な島々の連なりとして捉えなおそうとしているのに、どうして「ヤポ」ということが出てくるのか、と感じざるを得ないだろう。

そのように、沖縄と東北、そして、私たち自身を一つに連なるものとして捉えようとする時に、それを、無邪気に「ヤポネシア」と呼ぶことができない、というところに来ている。その時に、そうしたつながりをどのような言葉で呼んだらいいのかということが、私たちにとって、大きな課題としてあるように思う。仲里さんが言うように、「アンティューは遠い、そして近い」と思いたいし、沖縄についても、同様に、「遠い、そして近い」と思う。沖縄と東北、そして、私たちとの連なりをどう呼ぶのかということは、単に呼称の問題ではなく、その三者の間を、私たちはどのような関係でつなげるのかという問題でもあるだろう。

最後に、沖縄と東北、そして、私・たちが一つに連なる声の「ありどころ」とはどのようなことなのか、をめぐって、話してみたい。先程からも述べているように、「沖縄と東北、そして、私・たちが一つに連なる声の蜂起を！」ということが、私にとっての大きな課題であると考えているが、そのことを本当に問題にするためにも、「一つに連なる」とはどのようなことであるのか、そして、そこから発せられる声はどのようなところにあるのか、を考える必要があるように思う。

先程、岡本恵徳の、『琉球弧』と『東北』を同時に阻害する存在としての『倭(ヤマト)』という言葉引用したが、そのように、沖縄と東北は、中央のヤマトから見て、「周縁」的で従属的なポジションにあることを歴史的に強いられてきた、と言ってもいいだろう。近代国家以後、そのような周縁性は、改めて再構成されることになったが、その現在的なあり方として、一方で、アメリカの核基地でもある「軍事植民地」としての沖縄があり、他方には、「電力植民地」としての東北がある。ご存じの人も多いと思うが、福島原発というのは日本でも最も古い原発に属するもので、60年代の末に工事が着工され、71年には稼働している。そのように、福島原発の稼働と、沖縄の日本「復帰」とは、ほぼ同じ時期のことなのだが、そのことを改めて認識して驚いている。

「軍事植民地」としての沖縄をもう一度自らの手に取り戻すための苦難に満ちた闘いの中で、先程も言ったように、「琉球弧」という呼び方が改めて「発明」されているが、それに対して、「電力植民地」である列島の東北部は、そのような呼び名を獲得できてはいない。東北地方は、かつては、蝦夷(エミシ)といった、中央政府に最後まで服従しない「まつろわぬ民」の地だったが、沖縄の「軍事植民地」化からの解放を求める運動の中で、沖縄が改めて「琉球弧」として捉えなおされてきたように、自分たちをもう一度捉えなおしたり、名づけなおすといった段階に東北が到達していないのが現状だ。

その一方で、この間、沖縄の人たちは、日本という国民国家の「尺度」の外に出ようとする動きを示し始めているように思うし、それが、現在、沖縄の「自己決定権の樹立」といった言葉に象徴されるような段階にまで、向かおうとしているように見える。昨年4月25日、9万人以上が参加した普天間県内移設反対県民集会の会場では、「琉球独立旗」が翻り、「琉球弧の自己決定権の樹立へ」という檄文がまかれもした。また「琉球臨時政府」の国連総会での加盟が可決された。そこにも現れたような流れ

が、今、沖縄で確実に「表舞台」に出てきていると感じている。もちろん、日本国家の「尺度」の外に出ようとする沖縄での動きは、決して単一色のものではなく、そこには、様々な主張や運動グループが混在している。しかし、いずれにせよ、60年代末からの「復帰論」が、40年余りの歳月を経て、現在、琉球弧の「自己決定権の樹立」を求める動きとして結実していることに、私自身も、大きな感銘を受けている。

一方、「電力植民地」であり続けてきた東北は、大地震・津波・原発事故という三重苦の下で呻吟している。そこから生み出されようとしていることに、私たちがどのように参加できるかが、今、問われているように思う。あくまでも私の予想だが、現在、日本国家は、地方自治の「再編」の最終段階に入りかけていて、その行き着く先は「道州制」の導入だと思う。この大震災／原子力災害を「突破口」として、東北地方を「道州制」下での州として、再編成する可能性が大きいのではないかと。それに対して、現在の沖縄での動きに現れているような、国家の「尺度」の外に踏み出すことを東北の人たちに求めたり、私たちが東北に向けてそうしたアクションを展開するという事は非常に難しい。だが、少なくとも、日本国家の「尺度」をいかに揺るがし、また、それを「異化」することができるかということ、東北の人たちと同様に、私たちの課題としてもあるように思う。

そのような東北の今後をどう考えていくかという課題と、琉球弧の「自己決定権の樹立」を求める動きを一つに連ねることとして、この日本という国民国家から私たちがいかに「エクソダス(脱出)」できるかということが、大きな課題になってくるように思う。私たちは、そのことを、「日本国家—社会の構成的解体」と呼んでいる。それは、分かりやすく言えば、日本という国民国家の「解任」ということだが、それは、例えば、私たちの電力供給者としての北電や東電を「解任」するという事でもあるだろう。つまりは、アルゼンチンの民主蜂起でのスローガンのように、「皆、消えろ！一人も残るな」ということにつけるわけだが、そのことを単なるスローガンに止めておくのではなく、運動としてどのように展開できるかが、まさに問われているように思う。

沖縄の人たちが、琉球弧の「自己決定権の樹立」という新しい地平を切り拓こうとしていることに対応するようなレベルで言えば、私たちは、東北については、「自律・自己組織化」に基づく地方自治の「再発明」を構想しなければならないだろう。一方、沖縄については、「日米安保同盟」の解任をどのように進めるかということが、大きな課題とならざるを得ない。そのような「解任」と「再発明」の結合を、私たちはいかに日本国家の「解任」と一連なるのこととして創り出すのか。そのことに向けて、日本「復帰」以後の40年もの長い苦しみを経て登場しつつある、沖縄での「自己決定権の樹立」へ向かおうとする動きや、列島東北部での大震災／原子力事故による苦しみの中から生み出されようとするものと共に、私たちはどのように進み出ることができるのか、が問われているように思う。

そうしたことを考え合うためにも、私たちにとっての「高度必需品宣言」を本当にどのようなものとして構想できるのかということが、これからの私たちの運動にとって、大きな課題になるだろうと考えている。

〈註〉 当日の提起・報告の不十分な点を少しでもカバーするために、更に「補註」をつけることを考えている。その「補註」については、「エクソダス2011 通信5」を参照されたい。